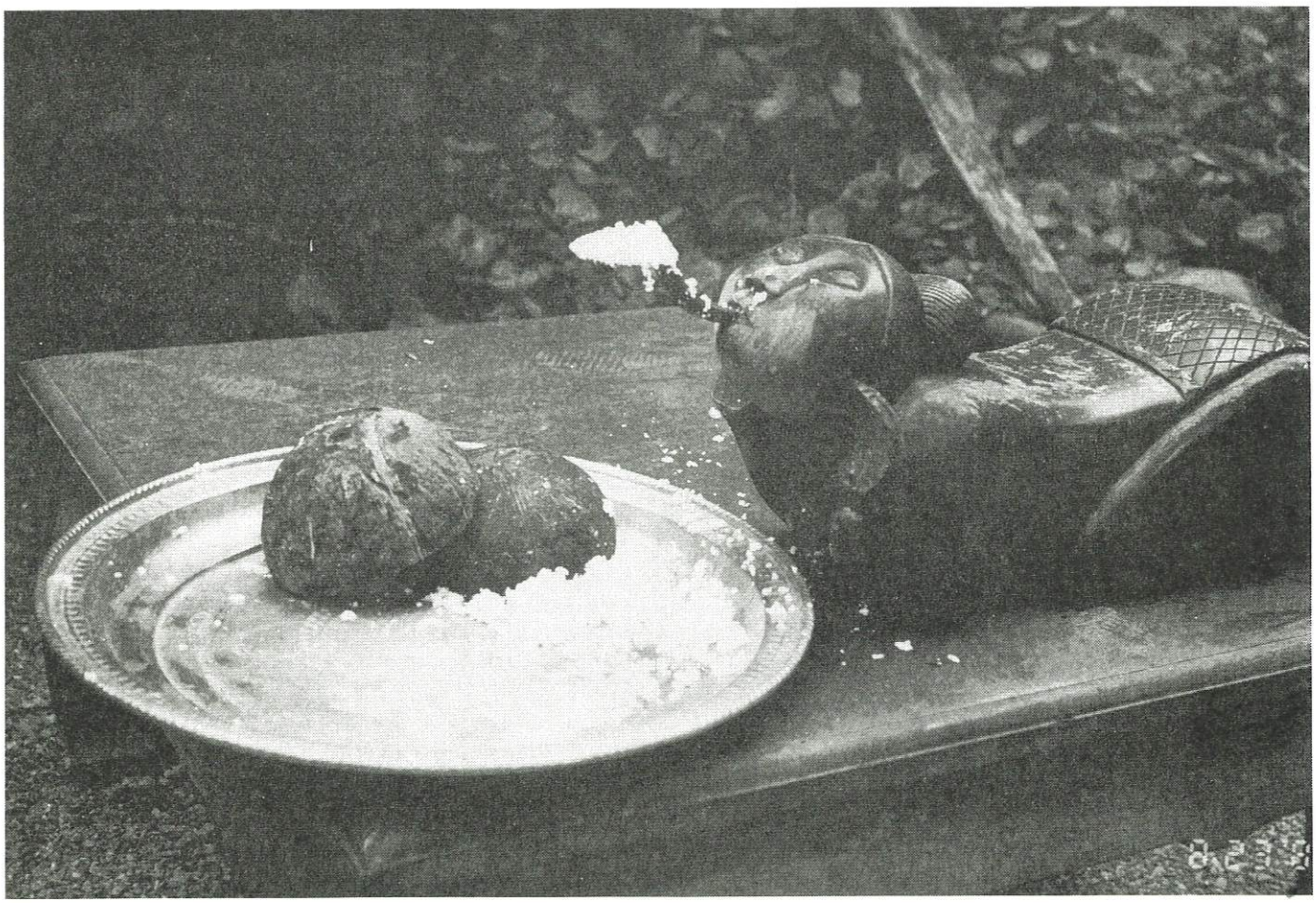
開発教育ニュースレター



No. 39

1992. 11

開発教育協議会

これは何でしょう？

タイのココナッツ削りです。

南の国のココナッツは、日本でいえば味噌や醤油のようなもの。いろいろな料理に使われます。

また、その油や繊維、葉っぱまでもがさまざまに利用され、庶民の生活になくてはならないものとなっています。どのような使われ方をしているか、調べてみてください。

内藤みち（フランス）

神奈川県立伊志田高等学校 文化祭訪問レポート

▲シンポジウムにて

“共に生きる外国人達” —— 9月12日・13日、伊志田高校の文化祭では、こんなテーマの国際理解コーナーが設けられました。伊志田高校は去年（91年度）国際理解教育推進校に指定され、今、いろいろな活動に取り組んでいます。その一環である国際理解コーナーを訪ね、見学させていただくと共に国際理解教育推進委員長の望月先生（同校、地理の先生）にお話を伺いました。

■第三世界に目を向けて・・・

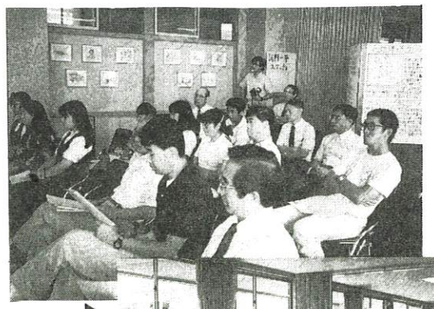
伊志田高校の国際理解教育の特色は「理解」の対象としてアジアを中心とした第三世界に重点をおいていること。（一般には欧米への交換留学などが主なんだそうです。）最近、周りで外国の人々が増えていますが、伊志田高校のある伊勢原市もイランや東南アジアからの人が多い。こういう現状をふまえ、生徒が彼らの国の状況を「身近な問題」として捉えていくことをめざしています。

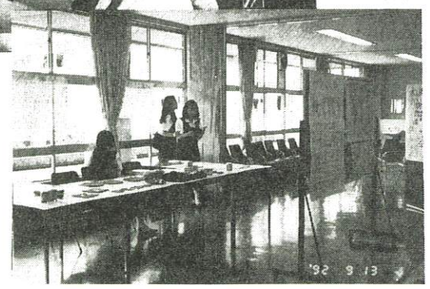
これまでにベトナム料理講習会や福祉委員会の生徒が中心となって募金などを行いました。特に募金は福祉委員会が募金先の団体をいくつか指定し、その活動を紹介したうえで生徒が自分で募金先を決めるという変わった方法をとり、生徒の反応はなかなかよかったということです。文化祭のコーナーは去年に続いて２回目。今回、新たな試みとして、外国からのゲストを迎えてシンポジウムを開きました。その他、福祉委員会の研究発表 —— これはＮＧＯの活動紹介や、シンポジウムのゲストのお国についてといった内容 —— 、タイへ植林活動に行った生徒の報告、アジアの民芸品バザーなどがありました。

■シンポジウムは・・・

おもむろに出されたコンビニの袋、中からは缶コーヒー、海苔、チョコレートが・・・シンポジウムはこんな場面から始まりました。望月先生の説明で、身近な食べ物の中にも、ゲストの方達の国と日本とは意外なつながりがあるんだな、などと考えます。ちなみにゲストはブラジル、韓国、コートジボアールの方でした。シンポジウムといっても今回は特にテーマは決めず、ざっくばらんに話をしようということでした。

まずは３人のゲストによるお話。日本で生活してみて、今、自分達が何を感じているのかということを率直に語っていました。参加者からは、日本語の読み書きはどのくらいできるのか、とか（ゲストの方はみんな日本語で話していた）民族衣装についてなど素朴な疑問があげられるなど、終始和やかな雰囲気。日本の企業進出や援助の問題についての質問や意見も出されました。


◀シンポジウム — 生徒の参加が少ないのは残念でしたが先生達が熱心だったのは印象的。



▶民芸品バザー・展示など福祉委員が時間をかけて準備したそうです。

■雑感／これから・・・

１時間半という短い時間でしたが、国際理解ということを考える上で大切だなと思うことがありました。これはコートジボアールの方の言葉です。——「日本人は、アフリカは貧しく不幸な国と思うかもしれない。でも自分達は１日を神様に従って楽しく生きている。ただ、日本など他の国を見てそれまで当然と思っていた自分達の生活の問題もわかった。」

「まず物の見方を変えること。」と望月先生は言います。生徒に授業の中で行きたい国と行きたくない国をあげてもらったところ、行きたい国には欧米が多かったのに対し、行きたくない国にはインド、アフリカなどが圧倒的に多く、その理由も不衛生、貧しいなどに片寄っていたそうです。コートジボアールの方の言葉は、自分の価値観で相手を見ているうちは理解なんてできないこと、相手を知ろうとして関わっていく内に、逆に自分達ことが見えてくるということをよく表していると思います。

今回は生徒の参加が少なかったことが少し残念でした。しかし関心が薄いとは言えないようで、実際、少しづつですが授業をきっかけとして今度は自主的に行動に移そうとする人も出始めているそうです。シンポジウムの後も残ってゲストの人達と話をする生徒もいました。

「できることから何でも取り入れてやってみたい。」という望月先生は、以前ＹＭＣＡのスタディツアーに参加したことがあり、そのつながりで同じように国際理解教育に関わる人やＮＧＯとのネットワークを広げて情報を共有しています。今後は春に芸術鑑賞会を開き、黒人のジャズを鑑賞すると共に、彼らの歴史を勉強したりするそうです。これからが楽しみです。

1994年に人口と開発国際会議開催

国際連合は1994年9月5日から13日まで，人口と開発国際会議（International Conference on Population and Development）を開くことを決めた．

これは21世紀における人口目標についての国際的な合意を得ることを狙いとする政府間会議で，その主題は「人口，経済成長そして維持可能な開発」，そして，人口とその構造，人口政策と事業，人口と環境と開発，人口分布と移住，人口と女性，家族計画と健康と福利，という六領域をめぐって論議が展開されるだろうとされている．

先のリオデジャネイロにおける環境と開発サミットでは，地球の人口問題について多くは語られなかったというが，人口問題に対する発展途上国の関心が低いわけではない．人口問題について地球全体で支出されている47億ドルの大部分は発展途上国が負担している（国連関係機関が負担しているのは16%程度）ことからも，発展途上国の人口問題に対する関心はうかがわれる．しかも21世紀までに地球の人口規模を妥当なレベルに押さえるためには，この倍の資金負担が必要だろうと見込まれている．そのあたりにも政府間会議を開く必要性があるようだ．

維持可能な開発委員会の設置論議

今年の国連の論議は国連，特にその経済社会部門の改組改革問題に集中するといわれているが，その中で，先のリオデジャネイロ会議の決定を執行するための維持可能な開発委員会（Sustainable Development Commission）設置問題が急浮上しているようである．

委員会の任務は維持可能な開発にかかわる国際社会の事業を再編することにあり，その設置についてはNGOを含め，基本的な合意が関係者の間で得られている．問題は国連改革計画の中での位置づけと国連諸機関の協力を確保できるかどうかにある．現在のニューヨーク国連本部にある経済社会開発部のもとにおくべきだとする意見もあれば，小さくても現在の執行機関から独立した事務総長直属の委員会にすべきだという意見もあり，国連事務局内の権限争いに巻き込まれないためにジュネーブに設置すべきだという提案もある．新しい委員会を設けるよりも，現存のさまざまな機関の事業の重複を整理するほうが先のような気もするが，国連の改組は世界の開発問題にとってよそごとではない．

世界とカンボジアの難民

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は今年を難民の自発的な本国帰還を促進する年とし，20以上の帰還計画に着手し，170万人の本国帰還を実現させようとしている．そのための予算がおよそ4億ドル，昨年の湾岸戦争におけるアメリカ軍の一日あたりの作戦費用の百分の一といわれる（UNHCRの年間予算総計は約8億ドル）が，自発的な本国帰還が期待されているのは，カンボジア，イラク，南アフリカ共和国，ハイチなどの難民である．

世界の難民はこの10年間に倍近くになっている．1991年の難民は約1,719万人，その40%は中東・南アジア地域の，35%がアフリカの難民である．そのうち，今，緊急援助を必要としているのが，バングラデシュに脱出したミャンマーの難民19万人，「アフリカの角」といわれる地域のエチオピア，ソマリア，ケニア，ジプチ，スーダンの飢えと内戦におびやかされている難民200万人近く，そして旧ユーゴスラビアの難民60万人であるといわれる．

カンボジア難民の帰還計画は新聞などで報道された通り，今年の3月に始まった．帰還登録をしたのは33万人といわれ，その47%は15歳以下の子どもたちで，難民の三分の二は1979年と1980年にタイ国境を越えて逃げてきた人たち．もう十年以上も難民キャンプで生活してきている．帰還計画はポルポト派の武装解除問題，地雷の撤去を含む道路の整備，受け入れ体制や再定着事業の進行に大きく左右されるだろうが，早い機会の解決が望まれる．

マラウイより愛をこめて

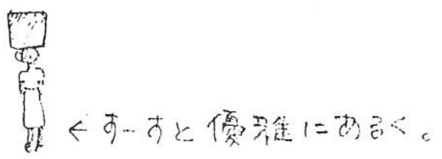
疋田朋子（青年海外協力隊々員）

青年海外協力隊の隊員として、アフリカのマラウイで活躍されている疋田朋子さんから、とても楽しいお便りをいただきました。現地に行って間もない頃の、村でのホームステイの体験談です。

第１日目。おみやげの砂糖、塩、紅茶、クッキーを買い、貸与の毛布３枚、シーツ１枚を携えて、私たち１８名の協力隊員は目的地へと向かいました。集合場所の小さな田舎店の片側に、１８名（ホストファミリー）＋見物人の人々がすでに集まっています。そして私たちは、緊張の面持ちのまま、紹介されたホスト・ファミリーの人と各々の村に散らばって行きました。

私のホスト・ファミリーは、Ｍｒ．Ｊｅｋｅです。実は私と同じ位の年齢のようです。彼の住む Chidoola 村までの道中、マラリアにかかったらどうしよう、５日間も知らない人ばかりの中で生活できるかな、トイレが汚かったらどうしよう、などと内心不安でいっぱいでした。しかし、私の心配をよそに目的の村まで約４０分、茶色の道以外、見渡せばとうもろこし畑ばかり。さらに、畑にいた子供たちが、死んでぐたっとなったハムスターのような鼠を持ってきて私の顔の前につきだし、「おいしい！」と説明してくれた時は、お先まっ暗という感じでした。そして着いたＪｅｋｅさんのお家と村の様子は、下図のとおりです。

Ｊｅｋｅさんは、農家兼レンガ作りの労働者ですが、この家も家具を含め、全てＪｅｋｅさんの手作りです。このお家にＭｒ．＆Ｍｒｓ．Ｊｅｋｅの２人が住んでいます。Ｍｒｓ．Ｊｅｋｅは妊娠していてもうすぐ赤ちゃんが生まれるのですが、お腹が大きいのに本当によく働きます。３度の食事を用意するほか、井戸に水汲みに行ったり、家の掃除をしたり、家畜に餌をやったり、裏の森で洗濯したりと、忙しく、しかし余裕をもって働いています。マラウイの女性はスリムな人が多いのに、すごいパワーです。私が腕をプルプルふるわせてやっと持ち上げられるような重たいバケツを、バランスよく頭に乗せて、手を使わずすいすい歩きます。少しもふらふらせず、体に１本芯があるような。バレリーナになったらさぞかし美しいだろうなと考えながら眺め入っていました。

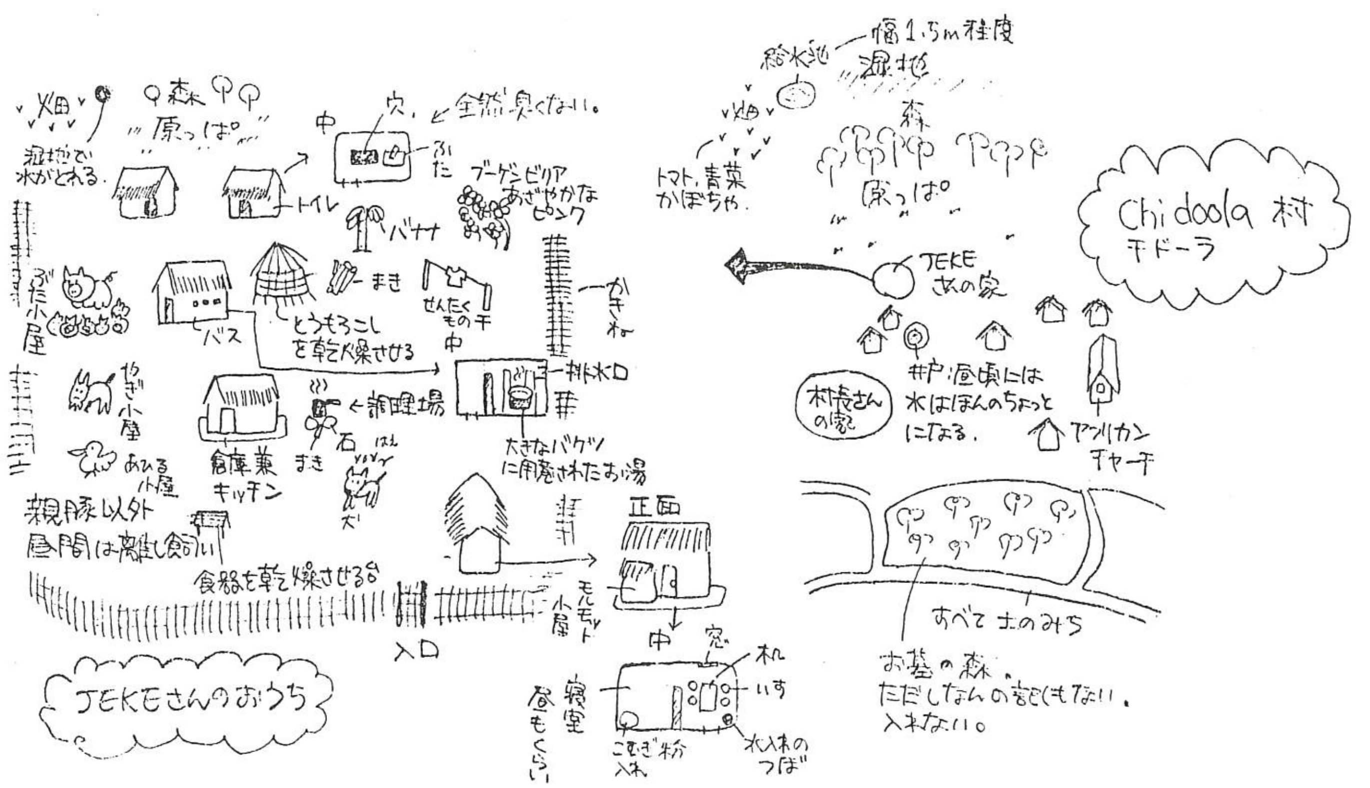


村の人には本当に親切にしていただきました。例えば食べ物。こちらの人は、とくに村では、主食はシマ（トウモロコシを叩いて製粉し、湯にまぜて団子のような固さにしたもの）なのに、日本人の主食が米、パンと聞いて、シマに較べて高いにもかかわらず用意してくれました。また、豚肉を食べるかと念をおされ、「好きだ」と答えると、スペアリブを買ってくれました（解体された豚が家の前までリヤカーで運ばれてきて、好きな部分を買う）。おいしかったけど、毎食出てきて、だんだん肉に付く蟻の量が増えたのには、辟易しました。そのほか、野沢菜のような野菜やかぼちゃの葉をピーナッツの粉と混ぜて炒めたものなど、毎食おいしくいただきました。

蟻といえば、小さいけれどすごい量で参りました。特に、夜は床に敷物を敷いて寝るので（私はたまらなくなってシュラフを使ったけど）、頭のすぐ上の方に蟻がうじゃうじゃいると思うと、ぞわぞわして、夜がとても嫌いでした。でも電気がないので、９時頃には寝ます。

また、こちらでは水はすごく貴重なのに、私の入浴のために大きなバケツにお湯をたっぷり朝夕用意してくれ、さらに衣類や靴まで洗ってもらってしまいました。本当にいたれりつくせりで、少し場所を移動すると、椅子を持ってきて座れというし、好奇心も手伝ってか、日中も夜間も村中、そして違う村からも次々と挨拶に来てくれ、５日間、ほとんど１人になる時間が持てないのが、正直いってつらかったです。それでも夜は女性で円陣を組んで踊ったり、とても楽しい日々でした。５日間で体力の限界を感じたけど…。

P.S. 村の人は写真がとても貴重らしく、送ってあげると約束したら、みんな入浴して一番良い服を着て、家の前で「気をつけ！」をしてしまうのです。私は自然な姿が撮りたかったんだけど仕方がありません。



開発教育ゲーム “Development Without Destruction”

イギリスのＮＧＯ“Action Aid”が、「破壊のない開発」という開発教育教材を開発した。以下は、ユニセフの“EDev Newswire”からの抜粋。

Action Aid, a well-known British NGO, has created Development Without Destruction, a board game rather like Snakes and Ladders, which aims to get players thinking about development as a positive process, i.e. empowering and life-enhancing, not destructive or unsustainable.

The game helps to understand strategic questions such as : "What do we want from the future ?", "Where do we want to be in ten years' time ?", "How can we get there ?", etc.

Players work in groups of two to five, deciding together on questions such as : "Who should benefit from the money given to poor countries ?", "Decide as a group whether you would buy a jet fighter or some clinics. Explain why", etc.

Development Without Destruction is relevant to Geography, Cross Curricular Themes, Environmental Education, Citizenship and Career Education and Guidance.

Development Without Destruction costs Two pounds and is available from Action Aid at the following address :

Action Aid
The Old Church House, Church Steps, Frome, GB-SOMERSET BA11 1PL

(Source: British Overseas Development, March 1992, Overseas Development Administration, London)

SHANTIH（シャンティ）

曹洞宗国際ボランティア会（ＳＶＡ）では、ビジュアルな東南アジア文化情報誌（季刊）『シャンティ』を創刊した。これは、1979年以来、タイ、カンボジア、ラオスなどをフィールドとして、さまざまな活動を行なってきた同会が、その経験と蓄積をもとに、より多くの人に東南アジアを知ってもらい、活動の輪を広げることを目的としている。

創刊号の内容は、「多民族世界を今、語り合う」（瀬戸内寂聴・有馬実成）「日本人のこころとカンボジア」など。Ａ４版３４頁、カラー。

定価３５０円。年間講読料２５００円（４回、送料込）。なお、同会会員には、無料で配布される。

国際ワークキャンプ

アジア協会・アジア友の会では、２月から３月にかけて、３本のワークキャンプを予定しています。

①バングラデシュ・トイレ建設
1993年２月27日～３月16日　参加費：約２４万円
②インド・井戸掘り
1993年２月28日～３月21日　参加費：約２９万円
③インド・井戸掘り
1993年３月３日～３月20日　参加費：約２９万円

①③は大阪本部事務所へ、②は東京事務所へ資料を請求してください。

アジア協会・アジア友の会
大阪：〒550　大阪市西区江戸堀　1-14-1
平和相互ビル７階
☎０６－４４４－０５８７
東京：〒101　千代田区神田駿河台　1-2
馬事畜産会館　Ｂ１
☎０３－３２３３－２９９８

高校生のための

アジア生活体験旅行

マレーシア・サラワクは、熱帯雨林でおおわれ、イバン族、プナン族など森の民が、その伝統文化を守りながら、「豊かに」暮らしています。でも、都市化、開発の波は森の民にも迫っていて、「生命の森」が、経済発展の名のもとに、また、日本に住む私たちの消費のために切り倒されていきます。
ＡＨＩ（アジア保健研修所）では、そのような光と陰の中で、そこに静かに暮らす人々と「共に生きる」ための体験旅行を企画しています。

期　間：1993年３月22日（日）～４月２日（金）
費　用：約21万円（大阪空港までの交通費を除く）
内　容：ＡＨＩ元研修生の働く村（ロングハウスでのホームステイ）６泊７日、及び都市スラム保健活動の見学など
問合せ：☎０５６１７－３－１９５０
（ＡＨＩ　中島・毛利）

近くて近いアジアを知る

AHI台湾ツアー

台湾の過去は苦悩に満ちており、今なお幾多の複雑さの中にあります。忘れてならないのは、日本に住む私たちとの関係です。過去において、現在において。
ＡＨＩでは、そこに生きる人々と出会うためのツアーを計画しています。日本語の通じる台湾で、しっかり話をしようという企画です。

期　間：1993年３月17日～24日（７泊８日）
※多少の変更の可能性あり
対　象：一般（特に実年の方、女性の方）10～12名
費　用：約15万円
（航空運賃、ＡＨＩ協力費、プログラム費を含む。現地滞在費約４万円は別途）
問合せ：☎０５６１７－３－１９５０
（ＡＨＩ　羽佐田）

ピースボート

冬休み南洋大航海

シンガポール、ブルネイ、ベトナム、インドネシア
マレーシア、カンボジア（アンコールワット）

１万トン級のチャーターし、“水先案内人”と共に 250～400名の参加者が航海に出ます。 ピースボートは一つの“場”。いかに楽しむかは、参加者ひとりひとりにまかされています。
全国各地で旅行説明会が行なわれています。詳しくは電話でお問い合わせください。

※水先案内人（交渉中）
石川　好(作家)、早見　優(女優)、木村晋介(弁護士)、筑紫哲也(ジャーナリスト)、イルカ(シンガーソングライター)　他

期　間：1992年12月25日～1993年１月13日
費　用：３７８，０００円（20日間全泊食事付き）
※部分参加（10日間～）も選択可能。
事務局の準備作業を手伝った人には、割引の制度もあります。
締切り：１１月２０日
問合せ：☎０３－３２３２－８５６１

オーストラリア・スタディ・ツアー

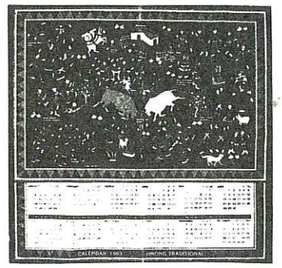
－これからの多文化社会を考える－

70年代後半のベトナム難民受入れに始まった、アジア系移民の増加にともない、マルチ・カルチュラリズム（多文化主義）を国是として、新しい国づくりを進めているオーストラリア。その社会制度や文化を、現在の日本の事情と比較しつつ、さまざまな文化背景を持つ人々が“共に生きる”社会のあり方について考えるためのスタディ・ツアーです。
行き先は、メルボルン、キャンベラ、シドニー。移民の被害者救済に取り組むＮＧＯ、政府が行なっている英語教育の現場などを訪ねるほか、現地の大学で討論会も行なう予定です。

期　間：1993年２月10日（水）～２月22日（月）
資　格：募集説明会、事前研修に参加できること。
◆募集説明会　11月28日 14:00~17:00
◆事前研修　12月12日 14:00~17:00
２月６日～７日（宿泊）
費　用：約２９万円
問合せ：☎０４５－６７１－７０７０
（神奈川県国際交流協会）

「山の民～モン族のくらし」カレンダー募金

曹洞宗国際ボランティア会では、ラオスの小数民族モン族の自立支援活動の一環として、モン族の伝統と文化をより多くの日本市民に紹介するとともに難民としてのモン族に対し支援を訴えるため、「カレンダー募金」を行なっている。
カレンダーは布の１枚もので、モン族の伝統的な刺繍技術を活かし、モン族の山岳部での生活の様子が描かれている。８色刷り。７５㌢×７０㌢。
１部２０００円＋送料（実費）。



問合せ：☎０３－３９４５－０９８１

ユニセフ・コイン・エイド

ユニセフでは、外国のコインを集め、途上国の子供たちのために生かそうと、「外国コイン募金」を行なっている。これは、海外旅行などの際に持ち帰ったものの、日本では両替できず、そのままになっている外国のコインを集め、それぞれの国に送ってユニセフの活動資金として有効に利用しようというもの。
毎日新聞社、日本航空、住友銀行、ＪＴＢ、日本旅行に募金箱が設置されているほか、郵送でも募金を受け付けている。宛先は次のとおり。

〒160 東京都新宿郵便局留置
日本ユニセフ協会　ユニセフ外国コイン係

問合せ：☎０３－３３５５－３２２１

開発教育協議会発行物価格一覧

１　機関紙『開発教育』

Ｎｏ．１４	特集「１９８８年金沢研究集会」	(1989. 2)	４００円［３００円］
Ｎｏ．１５	特集「開発教育の広がりを求めて」	(1989. 5)	５００円［４００円］
Ｎｏ．１９	特集「１９９０年宇都宮研究集会」	(1991. 1)	５００円［４００円］

２　その他
『開発教育ハンドブック　１９９０年版』　(1990. 3)　１２００円［８００円］
内容　：　開発教育の成立と展開、実践の手がかり（家庭、学校、社会教育、ゲーム）、資料など
『地球の未来のための１００冊－開発教育を考える文献案内』　(1990. 5)　３５０円［３００円］

３　以下のものは在庫切れですが、コピーを販売しています
『開発教育－その進展の現況』　(1989. 8)　１８００円［１６００円］
内容　：　国連ＮＧＯ連絡業務部発行“Development Education - the State of the Art”の日本語訳。欧米の開発教育の経験や問題点を論じている。
『開発教育基本文献集』　(1989. 9)　２７００円［２４００円］

※　［　　］内は会員価格。送料は実費をいただきます。詳しくは協議会事務局にお問い合わせください。

新入会員
小川紗永子（千葉）　榎本正文（千葉）　上田紀行（東京）　亀沢卓利（千葉）　渋谷裕子（神奈川）　石井由理（東京）
吉良　直（東京）　関谷容子（東京）　徳山　薫（東京）　青木佐保（東京）　江原裕美（埼玉）　久保田真弓（大阪）
木村宣子（広島）　小竹博昭（新潟）　吉田雅子（東京）　吉村治子（茨城）　井上敏弘（山口）　井上優子（神奈川）
柴田栄子（埼玉）　青野博由（神奈川）　日本労働組合総連合会（東京）　鈴木康之（埼玉）　前田降子（東京）
川上景子（千葉）　藤原亮子（愛知）　日高憲三（東京）　山本　桂（千葉）　渡辺直子（東京）　平田仁子（東京）

継続会員
樋口真貴子（埼玉）　梅村松秀（東京）　金子玲子（埼玉）　日比野真土（東京）　高崎小枝子（東京）　天野　環（東京）
小野静男（福岡）　小貫　仁（埼玉）　星野昌子（神奈川）　大森直樹（東京）　荒木重雄（東京）　阪崎健治郎（北海道）
中尾重嗣（広島）　高野彰夫（千葉）　若松悠紀子（東京）　村林美佐（愛知）　猪股雄輝（神奈川）　土井二郎（東京）
渋谷　恵（茨城）　吉田晴彦（山口）　村田富美恵（福島）　三島知斗世（愛知）　紀本栄一（大阪）　河本すみれ（岡山）
澤田寛旨（福岡）　平田洋一（広島）　高橋　健（愛知）　山本鐘生（岡山）　古賀武夫（佐賀）　坂井俊樹（東京）
金香百合（大阪）　岸本茂徳（新潟）　松本　洋（東京）　杉浦正和（千葉）

以上、いずれも１９９２年８月１８日～１０月１６日受付分、敬称略、受付順

バングラデシュからの手紙

11月　6日　スライド「私たちが見たバングラデシュ」、ゲーム
　　ゲスト：バングラデシュ・ワークキャンプ参加者
11月13日　輪になって話そう「識字シミュレーション」
　　ゲスト：中田　豊（シャプラニール）
11月20日　バングラデシュ舞踊・タゴール
　　ゲスト：リアズ・ウディアハメット、久保田幸代
11月27日　台所から見るバングラデシュ～カレーを食べよう
　　ゲスト：馬上美恵子（ロシュン）
12月　4日　まとめのワークショップ
　　「何故バングラデシュ？　何ができるか…？」
　　ゲスト：池住義憲（アジア保健研修所）

と　き：いずれも金曜日、午後７：００～８：３０
ところ：東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター
　　（千代田区神田美土代町７）
参加費：１回５００円（当日６００円）
　　※第４回目はカレー代として別に５００円
申込み：☎０３－３２９３－７０１１
　　（東京ＹＭＣＡ国際奉仕センター）

シンポジウム「先住民族の啓示」日本の人権侵害と環境破壊を問う

熱帯林の先住民とアイヌ民族の野村義一氏を迎えます。

と　き：１１月１６日（月）　１６：００～２０：３０
ところ：早稲田大学国際会議場（新宿区西早稲田1-20-14）
参加費：１２００円（同時通訳あり）
問合せ：☎０３－３７７０－６７０９
　　（サラワク・キャンペーン委員会）

国際シンポジウム「ヒマラヤの環境保全と開発協力」

ネパールの政府関係者や環境ＮＧＯのスタッフら、海外ゲストをまじえ、「ヒマラヤの環境問題の全体像」「地域コミュニティの活性化と森林保全」「ＮＧＯ、企業、行政の連帯」などのテーマで。

と　き：１１月１４日、１５日　いずれも９：００～１７：３０
　　※１４日は懇親会あり（１８：００～２０：００）
ところ：国際基督教大学（ＩＣＵ）本館１１６号室
　　ＪＲ中央線三鷹駅または京王線調布駅北口より小田急バス
　　いずれも２０分　☎０４２２－３３－３２２４
参加費：3000円（２日間）／2000円（１日のみ）　懇親会5000円
問合せ：☎０３－５３５０－８４５８（ヒマラヤ保全協会）

アジア協会・アジア友の会　開発教育研究会

開発教育についての学習会。

と　き：１１月１４日、１２月１２日
ところ：アジア協会・アジア友の会　集会室　（大阪）
問合せ：☎０６－４４４－０５８１

緑の地球防衛基金設立１０周年記念活動報告講演会・懇親会

フリッチョフ・カプラ博士（物理学者）、コモン・プラグトン氏（タイ王室林野局住民林業課長）、ムッサ・Ｒ・オビラ氏（タンザニア林業協会会長）らの講演など。

と　き：１１月２８日（土）　１３：１０～１９：３０
ところ：三省堂新宿ホール（新宿駅西口・西新宿４－１５－３）
参加費：懇親会費５０００円（会員は無料）
　　同時通訳イヤホンが必要な方は実費を負担
問合せ：☎０３－３２３３－３３７６（緑の地球防衛基金事務局）

江の島国際会議　女がつくる『開発』　～私たちの問題です～

人種、貧困、そして性による差別など、二重、三重の差別のもとにおかれながら、社会を変えていこうと行動を続ける第三世界の女性たちとの相互理解をとおして、あらたな「開発」のあり方を考える。分科会のテーマは、「南アの草の根の女性たち」「アジア女性の駆け込み寺～シェルターから買売春が見える」「村を変える女たち～ラオスからのメッセージ」「アジアからの“花嫁”～国際結婚からみえる女と男」の４つ。いずれも外国人ゲストとＮＧＯ関係者がパネリストとなっている。
当日は、さまざまな展示、バザーなども同時開催される。

と　き：１１月１４日（10:00~16:00）、１５日（10:00~12:00）
ところ：神奈川県立かながわ女性センター（藤沢市江の島）
参加費：無料
申込み：☎０４６６－２７－２１１１（かながわ女性センター）

アボリジニ・シンポジウム　「狩人の５万年」

国立民族学博物館で開催中の特別展「オーストラリア・アボリジニ展」にちなんでのシンポジウム。

と　き：１１月２１日（土）　１４：００～１６：００
ところ：国立民族学博物館講堂（大阪万博記念公園）
問合せ：☎０６－８７６－２１５１（国立民族学博物館）

海外ＮＧＯと語ろう「開発と女性」

イギリス（ＯＸＦＡＭ　UK/1）、インド（Isis-wicce）、オーストラリア（国際女性トリビューンセンター）のＮＧＯスタッフをパネリストとして迎え、シンポジウムを開催します。

と　き：１１月２８日（土）　１０：００～１６：３０
ところ：横浜女性フォーラム（ＪＲ戸塚駅より徒歩７分）
参加費：１０００円
定　員：３８０名（申込み先着順）
申込み：☎０４５－８６２－５０６６（国際セミナー係）

※　読者の皆さんからの情報をお待ちしています。締切りは偶数月の１５日。協議会事務局（ニュースレター係）宛にお送りください。

編集室から……

■ニュースレターの担当になって３号目。試行錯誤の繰り返しで、なかなかフォーマットが定まりません。読む方も読みづらいかと思います。恐縮です。
■それでも今回は、会員の方の取材記事（第２頁「文化祭訪問レポート」）があって、彩りをそえてくれました。絵心のある人がページを作るとやはり違います。
■運営委員も交替で記事を書き、より魅力ある紙面作りに取り組んでいきたいと思います。もうしばらくお付き合いください。

（Ｋ）

開発教育ニュースレター　隔月刊
１９９２年１１月１日発行
第３９号

発　行：開発教育協議会
〒１６９　東京都新宿区西早稲田２－３－１８－６１
TEL：０３（３２０７）８０８５
（月・水・金 10:00~18:00）
FAX：０３（３２０７）０２２６

編　集：ニュースレター編集チーム

お願い：ファックスには必ず「開発教育協議会」と宛名を明記してください。

開発教育協議会は、開発教育の推進に関心をもつ団体、個人であればどなたでも入会できます。会員の方には、協議会が発行する研究誌をはじめ、ニュースレターや研究集会・ワークショップ等のお知らせをお届けします。また、研究集会の参加費割引の特典もあります。
会費は１年単位を基本とし、その額は次のとおりです（いずれも１口あたり）。
団体会員　20,000円　／　個人会員　5,000円　／　学生会員　3,000円
入会の手続きについては、協議会事務局にお問い合わせください。